

## 第4回ESD連続セミナー概要報告

奈良教育大学 大西 浩明

- ◇実施日時 2024年7月23日(火) 19時～21時
- ◇方法 ZOOMによるオンライン開催
- ◇参加者数 40名
- ◇内容 「優良実践事例のESD分析」  
沖縄県伊平屋村立伊平屋中学校 高良直人先生

### 【実践報告】

前任校である那覇市立松島中学校における取組から

首里城のすぐ近く 生徒数631名 25学級

沖縄県教委のSDGs研究指定校として2年間ESDに取り組む

「国際的視野をもち、持続可能な社会を切り拓く生徒」

→ 「自ら学び、主体的に課題を解決し、未来を切り拓く資質・能力を身につけた生徒の育成」

SDGs達成のための教科等横断的なカリキュラムマネジメントを通して

→ ESDの視点を取り入れた指導の充実を図る 一人一授業

週1回の教科部会

「SDGs新聞」の発行 「SDGsパスポート」の活用

#### ・環境保全教育

コーヒー豆の麻袋を活用したプランター、グリーンカーテン(ゴーヤー)、地域クリーン活動

SDGs委員会の活動として、隔週でボランティア活動を行う

#### ・平和学習

2年生の遠足でひめゆり平和祈念資料館見学

修学旅行は長崎へ 長崎の中学生と平和学習交流、被爆体験者からの聞き取り

#### ・1年 末吉公園めぐり 「末吉公園の果てまで行ってQ」

様々な文化施設や自然が多くある

持続可能な憩いの場所としての末吉公園について考え、ポスターを作成

#### ・2年 「すい(首里)ま〜い」

自分たちの住む地域について深く知る学習

首里城再建に関する調査、研究

#### ・3年 地域の伝統文化に触れる

紅型染め体験など

那覇ハーリー、旗頭、末吉町十五夜祭、綱引き大会などに参加

#### ・「那覇市産業プログラム」 那覇市長からのミッション

→ 「10年後のよりよい那覇市」 いろいろな企業のSDGsの取組などに触れる

NAHAミライ City in school

県立武道館に15の企業を集めて、職業講話と体験

12の高等専修学校より講師を招き、職業体験を行う

NAHA子ども議会「10年後のよりよい那覇市を目指して」

- ・世界同時授業に参加

世界各地の日本人学校とのオンライン交流会

「世界へ発信 私たちが創る持続可能な社会」

### 成果

- SDGs や ESD への理解・関心が、生徒・教師ともに確実に高まっている
- ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の育成について、共通理解が進んできた
- SDGs カレンダー、マトリックス、ESD 単元構想図を作成できた → 学級に掲示
- 一人一授業の中に、「ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度の育成」を盛り込んだことで、教師の ESD に対する意識が高まってきた
- 周りの学校からの評価が高い 授業参観に来てくれる

### 課題

- 各部会で定例の部会を持つことが厳しい
- 新しく赴任された先生との意識の差
- 一人一授業の参観者が少ない授業もあり、十分な意見交流ができていない

### 【質疑応答、意見交流】

- Q. 隔週でのボランティア活動をするにあたって、どこで何をするか、どのように決めているのか？
- A. 地域の自治会や公園管理事務所に聞いて、学校で優先事項を考え実施している。
- Q. これらの取組に対する保護者の反応は？
- A. 「SDGs 新聞」で子どもの活動を発信している。保護者も好意的で、いっしょにボランティアに参加してくれる方もいる。
- Q. 那覇市長のミッションに対して、生徒がどのような提案をしたのか？
- A. 「那覇市にない路面電車を走らせる（電車の上にソーラーパネルをのせて）」  
「整備されていて、みんなが楽しめる那覇市に」「交通・公共通信サービスの改善」など
- Q. 行政や企業へのアプローチは教師主導でやった？ それとも生徒？
- A. 生徒から様々な意見を聞き取り、教師側でどんなことが学習としてできるかを考えた。それをもとに、教育委員会や知り合いなどに協力してもらってアプローチしていった。
- Q. 様々な取組を通して、ESD 以外のことで生徒が変容したと思える点は？
- A. 学力が目に見えて向上した。手を挙げて発表する子どもが増えた。学校全体が明るくなった。笑顔でのあいさつが飛び交うようになった。悩み事を相談してくる子どもが増えた。
- Q. ティーチャープログラムに参加されたのは高良先生だけ？
- A. 自分が研修で得たことを職員全体で共有できるように、教員向けの「SDGs 新聞」に掲載したりした。

(ブレイクアウトルームを経て)

- ・伝統文化は、なくなってしまっただけで当たり前なのがシステムを変えながら続いてきているという側面があると思う。そこも持続可能性を学べるポイントかと感じた。
    - ハーリーも昔は男性しか乗れなかったが、今は大会では男子の部・女子の部に分かれている。旗頭も昔は男性しか担げなかった。20年前ぐらいに初めて女性が持てるようになった。
- Q. この学校全体の取組は何年計画？

A. とりあえず研究指定のあった2年間やったが、SDGs から ESD へと視点も変わってきたと思う。

Q. 企業と連携する一番の取っ掛かりはどうしたか？

A. 企業と学校をつないでくれる組織があり、そこを窓口にした。企業も学校とつながりたいと思っているというのを強く感じた。

Q. どのようにして職員全体を巻き込んでいったかをもう少し詳しく教えてほしい。

A. 新しいものをつくるのではなく、既存のものを ESD の視点で捉え直すことを重視した。

「子どもたちのために」を合言葉に、学年主任に中心になってもらった、担任の負担感を軽減するために、GT に任せてとにかく「子どもの方を見ておいてほしい」と伝えた。子どもが頑張っている姿や楽しそうにしている姿を見ると、教員はやはりうれしいもの。

Q. 先生たちの変容は？

A. 授業の形態が大きく変わって活気が出てきた。一斉授業ではなく、学び合いの場が多く見られるようになってきた。「分からない」「教えて」と言える子どもが増えたように思う。

Q. 生徒の学力が上がったというのはどこを見てそう言えるのか？

A. 全国学力・学習状況調査と県内における学力テストでいずれも数値が上がっている。進学先を見ても、以前と変わってきている。生徒の授業に対する態度が明らかに変わってきている。

Q. 週1回の教科会の役割は？

A. 授業の進捗状況を互いに確認することも大事だが、それぞれの悩みについて交流したり話し合ったりすることで同じ方向を向いて授業に取り組めるようになっている。

Q. 取組の主となる教科は？ ボランティアと ESD をどのように結びつけたのか？

A. 中学校でも総合的な学習の時間が中心となるが、それをいかに他教科とつないでいくかが大事だと思う。SDGs 委員会の活動がどんなことにつながっているかを考えさせると、自然と ESD の学びになっている。

Q. 職員を取りまとめていくときの苦労は？

A. いろんな取り組みをたくさんやっているように見えるかもしれないが、ほとんどは既にやっていたものばかり。それを ESD の視点で捉え直すことで、子どもの変容を求めていくという点で分かってもらえたのかと思う。

Q. 地域の受け止め方、変容は？

A. 生徒がどんどん地域に入っていくことで大変好意的に受け止めてもらっている。地域からも「学校に来やすくなった」という声があり、実際多く来ていただけるようになった。